

# へき地児童の『観とる力』・『聴きとる力』についての一考察

石 川 桂 司

A Study of "Viewing Ability" and "Listening Ability"  
of the Children in an Out-Of-The-Way Community.

KEISEI ISHIKAWA

この調査研究は、岩手県教育委員会並びに二戸郡学校視聴覚教育連盟、その他の団体と行っている共同研究「へき地教育に於ける視聴覚的方法の有効性について— 視聴覚的方法による経験領域拡大の学習に及ぼす影響を中心として—」の実践に当つて生じた問題に取材・考察したものである。

## 1 は じ め に

近年、教育に於ける視聴覚的方法の利用は、とみに盛んになつてきている。この視聴覚的方法の効果に影響する条件として、Finn, Hoban, Dale らは、次の8つの点を挙げてゐる。即ち、(1)視聴覚教具使用の目的が明確であること、(2)被教育者の年齢、(3)被教育者のタイプ、(4)学習内容、(5)用いる視聴覚教具の性質、(6)使用の方法、(7)使用する場所、(8)教師の影響等である<sup>1)</sup>。これらは、Communicationの過程に於ける5つの要素、「送り手 Communicator」「受け手 Communicatee」「Communicateしようとする内容 Content」「用いられる道具と方法 Media & Method」「教育目標 Educational Aims」から把握されていると思われるが、本論文は、特に、「受け手 Communicatee」についての考察である。

山間へき地の多い東北地方に於いては、その文化的条件の低さから、特に視聴覚的教育方法の発展普及が必要なのであるが、この場合、その効果を規定している大きな要素として、児童生徒の「受けとる力」がある。かゝる観点から、特に、映画を「観とる力」、放送を「聴きとる力」について、都会とへき地の子供について比較考察してみる。

## 2 調 査 の 概 要

### a) 動機とねらい

前述の如く、吾々は、今年(昭和32年)10月から3年計画で、二戸郡面岸小・中学校に於いて、「へき地教育に於ける視聴覚的方法の有効性」を検証しようとし、特に、学習の基礎条件としての経験領域の拡大に視聴覚的方法が如何に有効であるかという点から実験研究を行つてゐる<sup>2)</sup>。その第一年目に採り上げた問題の一つに、「児童生徒の観とる力・聴きとる力を如何にして形成するか」という問題がある。即ち、実験計画として、毎月二回づつ一連の番組<sup>3)</sup>を与えてゆくのであるが、年に2・3度、巡回映画を観るだけであつたというこの地方の子供達にこれらの番組を与えてゆくには、先ず、この子供達の映画・放送に対する理解力を考えねばならない。その「観とる力」「聴きとる力」は、学校放送がめやすをおいているような都会部の子供達のそれと同一に考えるこ

1) Monroe: Encyclopedia of Educational Research p. 85. "Audio-Visual Materials" Edger Dale, James D. Finn, Charles F. Hoban.

2) 学校教育については、この点から、社会教育については、課題解決のための意識形成に如何に有効

であるかという点から実験している。

3) 現在(12月)のところ、紙芝居、スライド、映画(マンガ)、教材映画(主として社会科)二本、ニュース解説のような放送(テープによる再生)という番組である。

とは、全く不可能なことである。そこで、この子供達の現在もつている「観とる力」「聴きとる力」を把握し、この上に立つて、与えてゆく視聴覚教材 Materials を選択していかなければならない。そして、その低い「観とる力」「聴きとる力」を伸ばしていかなければならない。

故に、本調査のねらいとするところは、へき地児童(面岸小・中学校)の「観とる力」「聴きとる力」を測定し、どの程度の視聴覚教材を理解できるかということ、都市部児童生徒のそれとの比較に於いて把握することである。これをもつて、「観とる力」「聴きとる力」を伸ばすための資料とし、今後、与えてゆくべき視聴覚教材(実験計画のカリキュラム)決定のめやすとしたい。

## b) 調査対象

実 験 校:	岩手県二戸郡一戸町面岸小学校	1年生~6年生	82名
同	面岸中学校	1年生~3年生	23名
比較研究校:	岩手大学附属小学校	1年生~6年生	92名
同	附属中学校	1年生~3年生	43名 <sup>1)</sup>

比較研究校である附属小・中学校は、各学年15名に実施。但し、小学校1・2年は複式M学級、3・4年は同じく複式K学級、各学年16名づつに実施。5・6年については、複式を解体しているので、一般学級から、以前複式学級であったもの夫々15名づつを抽出した。又、中学校は、全校生徒423名のうちから、任意抽出法により各学年15名づつを抽出した。

実験校である面岸小・中学校は、全校生徒について実施した。

次に、面岸部落の生活について概略を説明してみよう。

この部落は、旧姉帯村に属し、昭和32年11月1日より、一戸町に合併した。東北本線小鳥谷駅から一戸町姉帯支所迄4km(国鉄バスにて連絡)、これから学校迄の6kmは、昭和27年に開通したが幅員がせまく、悪路のためジープが入る程度でトラックは入れない。この道は、今年(昭和32年)から、開拓を通り峠を越えて、隣村九戸村に通じている。

周囲は600m~1000mの山々にかこまれ、沢に沿うて家が並んでいる。面岸本部落は、海拔420mであり、更にそれから九戸村寄り3kmの地点にある開拓部落(25戸)は海拔600mである。合わせて88戸、535人が生活している。耕地は、山の傾斜面と谷間を利用し、畑123町7段(一戸平均1町6段)、田5町2反(一戸平均6畝9歩)である。畑の面積は一応広いが、産物は、稗・豆・麦等の雑穀が大部分で、主食は稗である。米は、姉帯部落(支所のある附近)の配給所から購入する。7人家族で、月1斗5升ぐらいの米を購入し、稗と混ぜて食べている。役場の調べによると、年間総所得額(昭和31年)は、一戸当り3万円から10万円という層が過半数を占める。細々とした現金収入の道は、この部落に伝統的な特産物である箕作りによるものと、開拓を中心とする雑穀販売、役牛の子取り、煙草栽培などである。(煙草は、この二・三年始めたばかり)。しかし、箕作りも近代化された機械のため近年とみに衰退し、現在、老人の冬仕事となつている。若い者達は、長男も次三男も、農閑期に出稼ぎに出る人が多い。農法も、機械化の芽生えがぼつぼつでいる程度であり、それも資金のある家で、2・3軒共同で購入しはじめている。稗の精白は、ほとんど

1) 都市部の学校として、附属小・中学校を比較研究校にすることは、児童生徒の生活環境を考えると

き、必ずしも妥当ではないが、調査人員の制約上、大学附属校を選んだ。

「バッテリー」<sup>1)</sup>を使っている。除々に近代化の道を歩んでいるとは言つても、部落のほとんどがこの「バッテリー」を使っているという姿がこの部落の現状を象徴している。又、商店は一軒もない。唯一軒だけ醤油を売る家があるが、これも斡旋的存在である。故に、日用品その他は、「山を下つて」（面岸の人々はこう呼ぶ）姉帯の商店からか、もしくは、一戸町の市日（月三回）に行つて求めてくる。

こうした経済的背景のもとに、文化的面では次のような生活をしている。電灯は昭和29年に本部落に入ったが、開拓には未だ入っていない。電話が無いので、通信は、すべて郵便もしくは徒歩での連絡である。公共的な建物としては、消防小屋と学校があるのみである。マス・コミュニケーションにふれることも少い。（映画・ラジオについては後述）新聞をとつている家庭は、小・中学校児童のうち8%である。（附属小・中学校の場合100%）病気のときのお祈りやまじないなどは余り見られないが、診療所も無いので、そなえつけの富山の薬か、学校の薬品（へき地学校教職員携帯用）にたより、熱など高ければ、一戸か小島谷までリヤカーで運んでゆく。

社会教育についての動きは、全くない。4Hクラブは有るが有名無実に等しい。一部の青年の間には青年学級を希望しているものもいるが、大勢は、全く無気力な生活をしていると言えよう。これから作りあげてゆく段階であろう<sup>2)</sup>。

こうした環境の中で生活する子供達の性格は、社会性に乏しく、純朴そのものである。文化的環境の低さから、遊びも栗拾い、きのこ採りなど山での遊びを中心とし、唯一の平地である学校の校庭で遊ぶ場合にも、唯、かけっこをしたり、ひなたぼっこなどを行っている。彼らの行う団体競技としては、ルールの単純なもの、例えば、ドッチボールであるとか、輪になつてするバレーボールのパスぐらいなものである。相撲については、大人も子供も強い興味をもっている。

子供達は学校から家に帰ると、牛まぶりや、子守りをし、中学生は畑仕事に一人前の労働力を要求されるが、長欠児童は無く、児童労働の学校に及ぼす影響はそれほど強くはない。農繁期に、早退児がやゝふえる程度である。

この学校は、二級へき地校であり、今年（昭和32年）4月、姉帯小・中学校の分校から独立校に昇格したばかりである。小学校中学校の併設校であり、教員は6名である。児童生徒は、小・中学校合わせて109名であるが、高校以上の進学者は、現在迄一人もなかつた。諸テストの結果、学力は、都市部に比し、全般的に低い。現在、児童図書や理科実験器具の購入等教育環境の整備も行われてきており、この実験研究と相待つて、子供達も大きく変化してゆくものと予想される。

### c) 素材（調査のために与えた視聴覚教材）とその説明

#### ① 紙芝居「サルの子」：

龍宮の王様タコが不治の病にかゝり、サルの生ギモを飲ませると治るといので、カメがサルをだまして陸から連れてきたが、クラゲのおしやべりでうそが発覚し、サルが逆に、キモを松の木の枝に忘れて来たといつわつて陸に逃げ帰る、クラゲが罰せられるという話。

#### ② スライド「三びきの子ぶた」：

三びきの子ぶた（兄ぶた、弟ぶた、妹ぶた）が大きくなり、母のもとから独立して、それぞれ、家を作る。狼がいるから丈夫な家を作れという注意にもかゝらず、兄ぶたは藁で、弟は木で作る、結局、最後、レンガで作つた妹ぶたに救われるという話。

1) テコの原理を利用した原始的な精白装置で、太い木の一端を碗状にほり、それに川水を引いて水をため、下に傾け、その力で他端につけたきねがう

すをつくしかけ。

2) 前述の如く、この実験研究は、学校教育のみでなく、社会教育についても行つている。

③ 映画(マンガ)「子犬と狼」:

森の番犬が羊を襲った狼と闘つて殺され、その時迷子になつた子犬が、兎の親子のもとに冬を越し成長する。春になり、兎を襲った狼を、森番人のおじいさんの応援を得てついにたおし、母犬の仇をうつて平和な森にするというソビエトのマンガ。

④ 映画(理科教材)「人に飼われている動物」:

小岩井農場のいろいろの動物の生態を把え、特に動物の進化と乳牛の生態、牛の反すうについて写したもの。小学校低中高学年向教材。

⑤ 映画(社会科教材)「お母さんのしごと」:

農村の一家の主婦の一日の生活を実写したもので、朝早く起きてから学校行きの子供達を送り出すまで(この映画の前半)を映写した。この中には、台所の仕事から子供の世話、自分が食べる暇が無いという食事時の忙しさなどを、ゆつくりしたテンポで描いている。小学校低中高学年・中学校向教材。

⑥ 放送(テープによる再生)「何があつたでしょう」:

小学校中学年向のローカル版ニュース解説である。毎週水曜日午前10時15分から15分間放送されるもので、盛岡市の小学校の先生と、三・四年の子供二人が、ニュース手帳を開きながら、前の週のできごとについて話し合う時間である。この調査に使つたものは、昭和32年10月30日放送されたもので、内容としては、(1)流行性感冒で県下の多くの学校が休校したということ、(2)国民体育大会が開かれ県の代表選手が活躍しているということ、(3)読書週間について、(4)灯台記念日について、(5)岩手日報文化賞(地方新聞社が県内の文化功労者に毎年贈つているもの)授賞についての5つが放送された。

尚、附属小・中学校については、映画の③④⑤のみを実施した。映画の③に於いて、すでに小学校1年生から本質的総合的把握をしている(後述)ことから、紙芝居やスライドについては、当然、理解しているものと考えて調査しなかつた。又、⑥放送についても、都合により調査しなかつた。

d) 調査方法並びに問題作製の基準

素材①②③④⑥は質問紙法によつた。即ち、紙芝居や映画を観せて直ちに記入させた。質問紙は、いずれも理解の深さを測定し得るように問題を作つた。問題の項目並びにそのねらいは別表参照のこと。

①~④の質問紙の項目は、次の基準にのつとつて作製した。(別表参照)

I: 場面々々にでてきたものを把える段階、即ち、表面的なものを断片的に把える段階。

例) でてきた動物の名前の記憶。

II: いくつかの場面の連続を、一つのまとまりある内容として把える段階、即ち、動作や短いできごとを把える段階、

例) サルは何にのつてりゆうぐうにゆきましたか。

III: 内容を総合的に把え、本質的なねらいをくみとる段階、即ち、全体を把握した上での判断を必要とする段階。

例) なんのために反すうするのですか。

素材⑤は、「映画『お母さんのしごと』を観て感じたこと、なんでもいいですから書いて下さい」という instruction を与え、作文法によつて評価した。

素材⑥の放送は、質問紙法によつて評価したが、問題とその作製基準は次の通りである。

(1) いま聞いた放送にててお話をしていた人たちはつぎのどの人たちですか(選択肢4): 放送形態の把握の段階(皮相的把握)

(2) いまの放送で話し合つていたことがらは、つぎのどれですか(選択肢10): 表面的ではあるが、放送全体を通じて把握している段階。

(3) つぎの } {の中から、いま放送になったものを選んで○をつけなさい。（流感で休校した学校数を選択肢3つから1つ、又、被患学童数を4つの選択肢から選ぶ）：部分的内容をやや詳しく把握している段階。

(4) いま放送になった読書週間のニュースの中で、話していたことは次のどれでしょう。（読書週間の意義について選択肢5つから選ぶ）：放送の訴えんとしていることを正しく把握している段階。

尚、①③④の質問紙の最後の問題には、「このえいが（かみしばい）のどんなところがおもしろかったですか」という項を作り、文による解答を求めた。勿論、「おもしろい」という表現にも問題はあろうが、子供達が、それぞれの教材のどんなところに印象づけられているかを調べる目的で質問した。

e) 調査した年月日

・面岸小・中学校の場合

素材①②③は、昭和32年10月8日午後、素材④は10月9日午前、素材⑤は10月8日に感想文を書かせることを予告して映写し、翌日の一校時に感想文を書かせた。（instructionは前述）素材⑥は11月6日午前に実施した。

・附属小学校の場合

素材③④⑤のみを11月18日午後に実施した。

・附属中学校の場合

素材③④⑤のみを11月16日午後に実施した。

### 3 調査の結果とその考察

素材①～④について、項目別に集計して得たのが第1表である。

第 1 表

素 材 並 び に 調 査 項 目	学 校	小 学 校						中 学 校		
		1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	1 年	2 年	3 年
調 査 人 員	面岸	22	18	13	13	12	9	8	9	5・6
	附属	15	15	16	14	15	15	14	14	15
素 材 ①：紙芝居「サルノキモ」										
I 1. でてきた動物のなまえ 〔選択肢15, 満点5〕(平均点)	面 附	0.82	3.53	3.92	4.08	2.83	4.11	4.37	4.55	5.00
II 2. サルの、のつていつたものは 〔選〕 (正解者%)	面 附	0	69	77	92	83	89	100	100	100
III 3. サルは、なぜ陸にもどつたか 〔選〕 (%)	面 附	14	31	⊕77	92	75	89	100	100	100
III 4. あたまのいいのは、だれか 〔選〕 (%)	面 附	5	0	23	38	33	22	50	77	100
III 5. あたまのわるいのは、だれか 〔選〕 (%)	面 附	0	15	7	31	17	11	50	77	80

素 材②：スライド「三びきのこぶた」		小学校	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	中学校	1 年	2 年	3 年
I 1.	こぶたたちのなまえ 〔組合せ法, 満点3〕 (平均点)	面 附	0.00	0.54	0.85	1.00	1.83	1.33	2.62	3.00	3.00	
II 2.	こぶたたちがおうちをつくつたわけ 〔選〕 (%)	面 附	14	23	77	69	83	77	100	100	100	
II 3.	いちばんじょうぶなおうちをつくつたのは 〔選〕 (%)	面 附	0	15	38	77	58	66	77	100	100	
III 4.	いちばんえらいぶたは 〔選〕 (%)	面 附	5	31	46	⊕85	50	77	77	100	100	
素 材③：映画(マンガ)「小犬と狼」												
I 1.	でてきた動物のなまえ 〔選択肢10, 満点7〕 (平均点)	面 附	1.3 5.1	4.2 5.6	4.6 6.3	4.6 6.4	5.3 6.4	5.2 6.7	5.4 6.2	5.7 6.5	5.8 6.2	
II 2.	母犬は, なぜ, しんだのか 〔選〕 (%)	面 附	14 86	54 93	92 94	92 100	83 100	100 100	100 100	100 100	100 100	100
III 3.	小犬は, なぜ, 狼とたゝかつたのか 〔選〕 (%)	面 附	10 ⊕73	46 100	⊕54 100	92 100	58 100	100 100	77 100	100 100	100 100	100
素 材④：教材映画「人に飼われている動物」												
I 1.	でてきた動物のなまえ 〔選択肢15, 満点7〕 (平均点)	面 附			4.2 6.3	4.8 6.8	5.3 6.6	4.9 7.0	4.9 6.8	5.5 6.5	5.7 6.6	
II 2.	「はんすう」とはどんなことか 〔選〕 (%)	面 附			15 94	31 93	⊕58 100	77 100	77 100	89 100	50 93	
II 3.	「はんすう」する動物のなまえ 〔選択肢15, 満点5〕 (平均点)	面 附			1.0 2.4	1.0 2.4	2.0 2.7	2.0 3.0	2.5 3.4	2.7 3.0	1.0 2.8	
III 4.	なんのために「はんすう」するのか 〔選〕 (%)	面 附			0 ⊕50	△54 64	25 67	33 93	38 86	44 79	20 80	

(註) 〔選〕は, 選択法により調査した項目, %は, その正解者の全児童に対する百分比を示す。

第1表から考察されることは次の通りである。以下, 正解者50%の線を一応の基準として考察してみる。

a) 紙芝居について

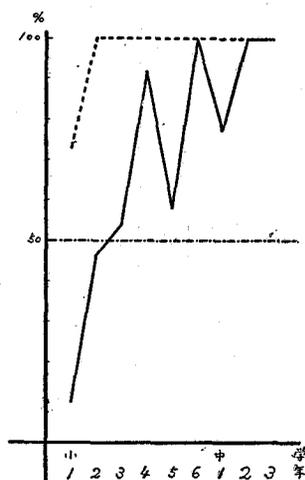
面岸の児童の紙芝居の「観とる力」は、大体、小学校3年で本質的なものを理解していると言える。即ち、場面々々の連続から一つの動作をくみとる段階（Ⅱの問題2）では、2年生で69%を示しているが、Ⅲの、総合的本質的なものを把握する段階では、3年生ではじめて77%となる。（問題3の⊕参照のこと）問題4・5になると、中学校1年生で、はじめて50%になるにすぎない。

b) スライドについて

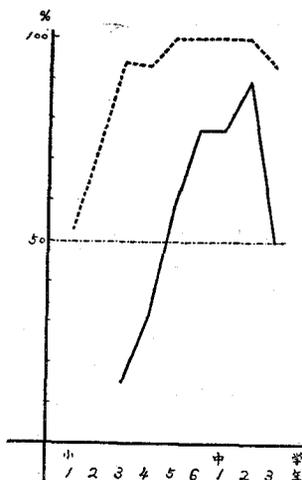
面岸の児童のスライドの「観とる力」は、小学校4年生以上で本質的なものへの理解を示す。即ち、問題2（Ⅱ）では、3年生で77%が正解を示し、Ⅲの段階問題4では、4年生ではじめて85%となる（⊕印参照）。Ⅱの段階とⅢの段階では、大体一年ぐらいのずれがあると言えよう。但し、このスライドは内容の簡単なもので、しかもマンガ的に描かれたものであり、大体、幼稚園から小学校低学年を対象として作られたものである。従つて、もつと高度な内容をもつ劇ものとか教材用スライドであれば、この数字は更に2・3年ずれるものと思われる。

c) 映画について

・マンガについてみれば、面岸の児童と附属小・中学校の児童では、大体2年の開きがある。即ち、問題3「子犬は、なぜ、狼とたゝかつたか」に正解者が、面岸の場合、小学校3年で54%であるのに対して、附属小・中学校では、すでに1年生で73%の正解者を示している。（⊕参照）（第1図参照<sup>1)</sup>）



第1図 素材③Ⅲ・3



第2図 素材④Ⅱ・2

尚、面岸の子供達のマンガに対する反応と、前述のスライドに対する反応を比較してみると、スライドの方が4年生から、映画のマンガの方が3年生から夫々50%以上の把握をしている。このことは、「映画（マンガ）の方がスライドより理解されやすい」という印象を与えるが、しかし、ただこの結果のみから「映画（マンガ）の方がスライドよりいわゆる『理解し易さ』Communicability<sup>2)</sup>がある」と結論するのは問題がある。即ち、取扱った素材の面から、

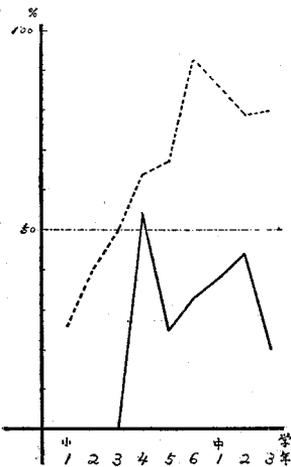
又、質問紙の問題の難易度の面からいろいろの考察がなされるべきであろう。Communicability についての結論は、更に多くの資料の上に立つて導かれねばならない。

・次に教材映画「人に飼われている動物」の結果について考察してみる。先ず、Ⅱの段階、即ち、場面場面の連続から一つのまとまりのあることがらや行動を把握する段階、問題2「はんすうとはどんなことですか」に関しては、附属小・中学校と面岸小・中学校を比べた場合、児童の「観とる力」に4年の差がある（第2図参照）。即ち、附属小学校の1・2年で、夫々53%73%の正解者があるのに対して、面岸小学校では5・6年で58%77%を示している。（表⊕印参照）目をⅢの段階、即ち、映画の総合的本質的把握の段階、問題4「なんのためにはんすうするのですか」の結果

1) この図は、第1表の素材③のⅢ・3をグラフ化したものである。点線は附属小・中学校、実線は面

岸小・中学校（以下、各グラフ全部同じ）

2) 西本 三十二：デールの視聴覚教育、p.59.



第3図 素材④Ⅲ・4

第2表 素材④「人に飼われている動物」問題5「このえいがのどんなところがおもしろかったですか」

		小1年		2年		3年		4年		5年		6年		中1年		2年		3年		計			
		面	附	面	附	面	附	面	附	面	附	面	附	面	附	面	附	面	附	面	附		
I	1. うし, うま, ひつじなどの列挙「うしがいたところ」など					4	6	4	2	4	1	1							20	2			
	2. 小さいどうぶつたち									1											1		
	3. 見たことのない動物たち		2																			2	
II	4. うしが, しつぽをふつているところ		1																			1	
	5. うし, うま(こうしと母うし)が, かけまわっているところ		1	3	2	1	3	1	2	2	1	4	2	1							10	13	
	6. うし(らくだ)が口をもぐもぐして反すうするときの表情					3		5	1			3							2		1	13	
	7. じゃこううしのえ										1											1	
	8. ふたの子がおやの乳をのむところ					2						3	1									6	
	9. こうしが乳をのんでいるところ					2																	2
	10. ひろいまきばで, うしが草をたべているところ							1								1							2
11. うしのいろいろのところ															1							1	
II'	12. うしが, うまれたところ		3	1	1					1	2		1	1	2						5	7	
	13. ひつじのけを, かるところ			4	1	4		1	1	1	2		3	1	1		1			5	15		
	14. 乳をしぼっているところ		4	2				1		1		2			2							12	
	15. こうしがうまれてから, 立ちあがるまで			1		4		2														7	
	16. こうしがおやうしから, はなされるところがかわいそう							2										1				3	
	17. 牛のうまれる「生態」を知った																		1			1	
	18. うしの子供が生まれた後, 育つてゆく生活のようす											2	2	2				1				7	

Ⅲ	19. うしの「消化」「反すう」について うつしてあるところ	2				1	1					2	1	7					
	20. うしが「消化するのに細菌をたくみに 利用しているところ」												1	1					
	21. うしの「内部構造」について(「お なかのなか」)	1											2	3					
	22. 「動物」の「性質」について				1	1				1				3					
	23. 「いろいろの動物の生活様式がわか った」											3		3					
	24. 「動物の進歩(歴史)がわかった」			2			1	1	1	1	1			6					
25. 「動物の親子の愛情について」								1	1			1	3						
そ の 他	26. ためになつた									1			1	2					
	27. おもしろくなかつた												2	2					
	28. 無答無記入	2	1	5	4	3	2	1	4	1	5	2	6	2	29	9			
「 」の語文は原文のまま 計		16	16	13	16	13	14	12	15	9	15	8	14	9	14	6	15	70	135

この表は、素材④教材映画「人に飼われている動物」の問題5「この映画のどんなところがおもしろかったですか」について集計したものである。文章表現されたものを、文章の巧拙は除き、その内容を判断して、これを前述のⅠⅡⅢの段階に分類し、さらに各段階の中でも、より表面的なものから本質的な把握をしているものへと順序づけ分類したものである。尚、Ⅱ'は、Ⅱが単なる断片的行動や表情や形などのおもしろさ・こつけいさに反応しているのに対して、これらが連続してまとまりのある行動に反応しているものとして分けてみた。

この表をみると、面岸では、殆ど3分の1近くの子供(70名中20名)がⅠの段階、即ち、個々の場面に出てきたものに反応し、「うし」「うま」或いは、「ひつじがおもしろかった」などの表現をしている。そして、Ⅱの段階で11名、Ⅱ'の段階で10名、Ⅲの本質的なものを把握する段階で興味をもつたものは皆無である。即ち、低学年では勿論、小学校高学年、中学校に於いても、映画の本質的なねらいに興味をもつたものは無い。これに対して、附属小・中学校では、全体の計の欄をみると、Ⅰの段階がごく僅かで(135名中5名)、他はⅡ或はⅢの段階である。Ⅲは135名中34名反応を示している。そして、学年が進むにつれて高いレベルでの把握をしている。このことから考えても、素材④の教材映画については、面岸の児童生徒に総合的本質的理解が無理であると言える。尚、第2表の無答無記入者は、表現力の乏しい点に起因するものと、中学生の場合、青年前期の心理からくる調査への反撥感に起因するものがある。

・次に、事後、作文法により感想文を書かして評価した教材映画「お母さんのしごと」について結果を考察して見る。これも、表現された文の巧拙については考慮せずに内容を判断して分類した。分類の基準は、把握の深さを段階づけて分類項目を設定し、夫々、前述のⅠⅡⅢに位置づけた。

第 3 表 素材⑤教材映画「お母さんの仕事」(感想文による調査)

素材並びに調査項目	学校	小学校						中学校		
		1年	2年	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年
Ⅰ 1. 単なる映画内容の叙述の段階 (%)	面 附			85	54	75	66	50	38	50
		47	22	0	15	0	0	0	0	0

II 2. 母のしごとのいそがしいことをくみとつている段階 (%)	面附	28	6	30	15	26	8	7	38	0	0	20
II 3. 自分の母のいそがしさと比較している段階 (%)	面附	6	13	0	0	0	0	7	0	0	14	16
III 4. この母のいそがしさに同情している段階 (%)	面附	0	±26	13	21	0	13	7	0	±25	14	0
III 5. いそがしさを知り感謝している段階 (%)	面附	0	±13	19	21	40	26	14	12	±12	7	0
III 6. 母に手伝う決意をしているこの映画のいそがしさを批判している段階 (%)	面附	13	±20	19	14	33	53	64	0	±25	57	33
その他「おもしろかった」などの感想 (%)	面附	6	0	19	14	0	0	0	0	0	0	13

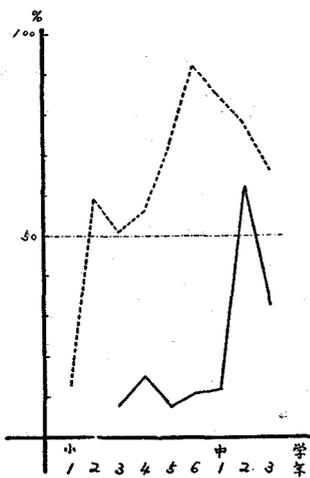
即ち、項目1は、単に映画の内容を追って叙述したもの、例えば、「お母さんは、朝6時15分に目をさまし、それから台所に行つて火をもやしました。それから……」のようなものである。これをIの段階と考えた。

項目2は、IIの段階で、映画の中から母のしごとが忙しいものであるということにくみとつているような感想文を分類した。項目3は、更にこの忙しさを自分の家の母の仕事と比較しながら把握しているもので、やはりIIの段階とした。

項目4は、母の忙しさに同情している段階、例えば、「お母さんは、ごはんを食べるひまのないほど忙しいのでたいへんだなあと思いました」という感想がでてくる。項目5は、「たいへんありが

たがたいと思つた」の如く母の忙しさに感謝しているもの、項目6は、この感謝の気持に立つて、「これから私もお母さんに手伝おうと思いました」の如く、映画の訴えんとするところを理解し、自分の行動を変えてゆく力としているものを分類した。そして、この項目には、特に映画の総合的理解の上に立つて映画の内容そのものを批判しているもの、例えば、「このお母さんは、工夫すればもつと忙しくなくすることができる」とか、「この映画にでてくる女の子は4年生にもなるのだからもつとお母さんに手伝つてもよいと思う」などのものを含めた。これらの批判的なものは附属小・中学校の児童生徒のみにみられる。

尚、第3表の数字は、1からその他の項目まで7つの項目夫々に占める児童数の全体に対する%であるから、各学年の数字を合計すると100%になるものである。この点、第一表の%と異なる。



第4図 素材③III・456

この表から考察されることは、この教材映画の扱え方は、面岸小・中学校と附属小・中学校の子供では6年の開きがあるということである。即ち、附属小学校の2年生の反応と丁度同じような形を面岸中学校の2年生が示している。（第3表⊕印参照）Ⅲの段階を合計して50%以上となるのは、この学年である。（第4図参照）

d) 放送について

前述の如く、10月30日の小学校中学年向ニュース解説をテープで再生し、質問紙で調査した結果第4表を得た。（項目については前述の問題作製基準を参照されたい）。

第 4 表

素材⑨：放送「なにがあつたでしょう」 (10月30日放送, 小学校中学年向ニュース 解説, テープにて再生)	学年	小						中		
		1	2	3	4	5	6	1	2	3
1. いまのほうそうにでて、おはなしをした人たちは 〔選択肢4〕 (%)	面岸小・中学校のみ			57	77	100	89	100	90	100
2. いまのほうそうされたことがら、5つをえらべ 〔選択肢10, 満点5〕 (平均点)				2.1	2.6	2.9	3.3	3.2	4.2	3.9
3. 県内、流感休校数、患者数 〔選択肢満点2〕 ( " )				0.4	0.5	0.3	0.6	0.8	1.3	1.2
4. 読書週間のニュースで話していたことは 〔選〕 (%)				50	23	42	44	⊕88	60	66
	調査人員			14	13	12	9	8	10	6

これによると、1の欄でみられる如く、放送の形式的な面については面岸小学校3年生でも聴きとつているが、放送の内容について、訴えんとしている本質的なものは、中学校一年生ではじめて把握している（⊕印88%）。しかるにこの番組は、N・H・Kで小学校中学年向に構成しているのであるから、面岸小・中学校の子供達の場合、N・H・Kのねらいとする学年より大体4年ぐらい上の学年に理解されていることになる。

以上、考察の結果をまとめてみると、「観とる力」については、へき地（面岸小・中学校）と都会（附属小・中学校）の子供では、紙芝居で3年、スライドで4年、マンガ映画で2年、教材映画で4年から6年或いはそれ以上の差が見られる。又、「聴きとる力」については、N・H・Kの目標においてるところと約4年間の開きのあることが分つた。このことから、へき地児童と都会の児童の視聴覚教材に対する理解度に差がみられ、その差は、教材の程度が高くなればなるほど大きくなる傾向にあることが分る。

4 「観とる力」「聴きとる力」に差の生ずる原因

しからは、このような差、開きは、どのような原因によつて生ずるのであろうか。勿論、単一の原因によつて生ずるものではなく、複雑な要因のからみあいにて生ずる結果である。それは子供の生活全体から規制されると考えられる。今、その中、児童調査票<sup>1)</sup>その他の諸調査の結果から、二・三の要素を採り上げてみる。

先ず、子供の素質に差があるか否かの問題である。新田中B式団体知能検査の結果をみると、小

学校では、面岸の平均偏差値40.8に対して、附属では62.9、中学校では、面岸が38.2、附属が57.8でいずれも20近くの差がある。勿論、この20という差が実際の知能の差であると額面通りに受け取るわけではない。団体知能検査の本質的にもつ都会的性質、都会児童とへき地児童の思考の形態の差から生ずるもの、更に、テスト実施に必然的に伴う誤差などいろいろの要素が考えられる<sup>2)</sup>。しかし、知能検査結果に表われたこのような差もその原因の一端を占めるものであろう。

しかし、「観とる力」「聴きとる力」に表われた差の最も重大な要因と考えられるものに、子供の生活環境と既得の視聴覚的経験にみられる差がある。生活環境については前述の如くであるが、こうした環境の中で、子供達は如何なる視聴覚的経験をしているか。

先ず、ラジオは附属小・中学校の場合、勿論、児童の全戸にあつて、1日平均2～3時間聴いており学校では放送教育も行つているが、面岸では、88世帯のうち37世帯しかラジオを持っていない。学校では、ラジオ体操に放送を利用する程度であつた。映画については、都会(附属)であれば、興業映画館(市内に13館)のみならず、公会堂、学校、公民館、教育会館、友人の家(8mm映画)などいろいろの場所で、月平均2.7回観ているのに、面岸の子供達は、これまで、年に3～4回、学校にまわつてくる巡回映画をみるのみであつた。

勿論、「観とる力」「聴きとる力」に表われた差は、単にこゝに列挙した素質的な面と既得の視聴覚的経験の差のみによるのではなく、子供の言語生活を含めた生活経験全般から規制されるものであり、更に学校に於ける教育内容・学習活動などいろいろの要因によつて生ずるものであろう。

が、特に、面岸の子供達が1年間で観る映画を1ヶ月で観る附属の子供達、半数以上ラジオの無い面岸の子供達と1日必ず2～3時間聞いている附属の子供達とのこうした視聴覚的経験の差が、「観とる力」「聴きとる力」に表われる差の大きな原因であると考えられる。

## 5 む す び

以上の考察から次のことが結論づけられる。

へき地の児童生徒と都会の児童生徒の間には、生活環境や既得の視聴覚的経験などの差から、「観とる力」については2～6年、「聴きとる力」については4年ぐらいの開きがある。

このことから、視聴覚教育をおし進める場合、同じ教材を劃一的方法で利用することには大いに問題がある。受け手(被教育者)の理解力がどの程度であるかということ把握して、教材の選択や指導法を考えてゆかねばならない。即ち、「この目的のためには、この子供達にとつて、映画よりもスライドの方が有効である」ということもあり得ると思うし、又、事前事後の指導の程度についても、単に視聴覚教材利用の目的、教材の内容のみから考えるだけでなく、こうした受け手の理解力との関連に於いて考えるべきであらう。

更に問題は、都会部と同じような視聴覚教育の効果をあげていくために、へき地児童のこうした低い「観とる力」「聴きとる力」を如何にして伸ばしてゆくかという点に向けられてゆく。現在(昭和32年12月)面岸小・中学校では、前述の研究目的のため、月二回、講堂映画の形式で、紙芝居・スライド・マンガ・ニュース映画・社会科教材映画・放送を、若干の事前事後の指導<sup>1)</sup>を行ひながら与えているが、子供の視聴覚教材に対する理解度は、2ヶ月以前より高くなつてきているよ

1) 共同研究の基礎調査として、子供の生活分析のために行つた調査。  
2) 筆者は、面岸小・中学校の知能偏差値40.8、38.2が、そのまゝ、この子供達の知的限界を示すものとは考えていない。先天的に有する知的学習の可

能性が、へき地のテンポの遅い生活形態に影響されてこうした差が生ずるのであつて、潜在的な能力はもつと高いものと考えている。これについては、別の機会に論じたい。

うである。別に特別の指示を与えたわけではないが、子供達は、自然にメモをとりながら放送を聞くようになってきている。この問題については別の機会に報告したいと考えている。

参 考 文 献

- (1) E. DALE: Aadio-Visual Method in Teaching 1954.
- (2) MONROE: Encyclopedia of Educational Research.
- (3) 乾 孝: 映画と子供の理解力, 「児童心理」昭27, 12月号.
- (4) 国際基督教大学: 視聴覚教育研究集録Ⅲ, 1956.
- (5) 西 本 三十二: デールの視聴覚教育, 1957.